

脳卒中患者の栄養状態、ADL、筋力の関係性 第2報

～脳卒中患者の体重変化と筋力の関係～

吉田 拓¹⁾ 中島 崇暁¹⁾ 風晴 俊之¹⁾ 渡邊美鈴²⁾ 谷崎義生³⁾ 美原 盤⁴⁾

1) 脳血管研究所美原記念病院 リハビリテーション科

2) 脳血管研究所美原記念病院 栄養科

3) 脳血管研究所美原記念病院 脳神経外科

4) 脳血管研究所美原記念病院 神経内科

【はじめに】

脳卒中患者において、痩せている者は、体重増加を認めても ADL の獲得には影響がなく、肥っている者は痩せることで ADL を獲得しやすいことが示されたと報告した。そこで、脳卒中患者の、体重変化に伴う体組織の変化を追究するため、筋力と BMI の変化の関係性について調査した。

【対象・方法】

H23 年 4 月から 2 年間、回復期リハビリ病棟に入棟した初発脳卒中の片麻痺患者のうち、非麻痺側の握力・体重測定が可能な 208 名（男性 125 名、女性 83 名）を対象とした。糖尿病、消耗性疾患、心疾患がある者は除外した。調査項目は回復期リハビリ病棟入退棟時の握力、BMI とした。まず男女ごとに、BMI の増減により増加、維持、低下の 3 群分類し、握力の変化を比較した。また握力の利得と BMI の増減について相関関係を調べた。

【結果】

男女ともに BMI の増加、維持、低下の、どの群においても握力の有意な変化は認めなかった。また、握力の利得と BMI の増減の関係性において有意な相関を示さなかった。

【考察】

今回の結果より、回復期リハビリ病棟の脳卒中患者の体重増減は、筋量の変化ではなく、脂肪組織などの変化が反映されていることが推察された。肥っている者は脂肪量の低下が ADL 獲得に有効であることがより強く裏付けられた。また痩せている者が体重低下を示しても、動作獲得に必要な非麻痺側の機能低下には影響しない可能性が示唆された。